

抄 録

第78回日本泌尿器科学会群馬地方会演題抄録

日 時：平成30年2月17日（土）15時00～
 場 所：刀城会館（群馬大学医学部内）
 会 長：小林 幹男（伊勢崎市民病院）
 事務局：柴田 康博（群馬大院・医・泌尿器科学）

〈セッションI〉

座長：宮尾 武士（群馬大院・医・泌尿器科学）

臨床症例

1. 演題取り下げ

2. ラジウム 223 投与により高度の血小板減少をきたした一例

大澤 英史, 岡本 亘平, 上井 崇智

（桐生厚生総合病院 泌尿器科）

症例は80代男性。6年前の既往に悪性リンパ腫によるR-CHOP療法8コースの治療歴あり。当院には尿閉・PSA高値で紹介出現。その後Grade4の血小板減少が持続し永眠されるまでの4か月間、断続的な血小板輸血を要した。

初診、PSA13.14にて前立腺生検施行し全12か所から前立腺癌を検出。Gleason score 4+5=9。cT3aN1M0の診断にてCABを開始。PSA最低値0.13であったが治療開始6ヶ月でPSA2.22と上昇しリンパ節転移の増悪、多発骨転移を認めたためデノスマブ投与を開始。CRPCの診断にてドセタキセル70mg/m²開始するもGrade3の肝障害を認めたため1コースで中止。仙骨・左大腿骨に対して緩和照射を施行した後、2nd lineとしてラジウム223投与を選択。投与開始9日目に血痰・血小板減少が出現。その後Grade4の血小板が持続し永眠されるまでの4か月間、断続的な血小板輸血を要した。

3. Eriburinが奏功した後腹膜脂肪肉腫の一例

清水 信明, 蓮見 勝, 村松 和道

大津 晃（群馬県立がんセンター 泌尿器科）

後腹膜脂肪肉腫は、比較的まれな疾患であるが、後腹膜に発症する軟部肉腫としては頻度が高く、巨大腫瘍として発見されることが珍しくない。腫瘍摘出が第一選択とされるが、局所再発率は少なくない。我々は、再手術は困難と診断した術後再発症例に対し、Eriburinを投与し、1年以上にわたり縮小維持を認めたので報告する。

症例は、59歳男性、腫瘍摘出1年後に再発を認め、再度摘出を行った、右腎周囲に再再発した。十二指腸壁への浸潤が疑われ、手術は困難と判断した。このためPazopanibを投与したが、肝酵素上昇のため中止せざるを得なかった。Eribulinを開始し、8コース終了時点でPRを得た。現在1年以上経過するが、SDを保っている。副作用は、足底の末梢感覚神経障害が主なものであった。

そ の 他

4. 黒沢病院における排尿自立指導料算定の現状

曲 友弘, 小倉 治之, 黒澤 功

（黒沢病院 泌尿器科）

奥木奈美子, 眞舘まなみ, 日越恵美子

（黒沢病院 看護部）

【緒言】排尿自立指導料の算定を2016年7月から開始した。【対象と方法】2017年12月までの算定状況を検討した。全体の検討後、泌尿器科、脳神経外科、内科を抽出して追加検討した。【結果】1年6か月で790例2,076回算定した。月毎の件数は、7月は18例26回であったが、その後は45-55例100-150回であった。診療科毎の算定件数は、泌尿器科、脳神経外科、内科の順に、新規329例42%、334例42%、109例14%、のべ525例27%、1,037例53%、322例17%であった。疾患毎の新規人数は、泌尿器科は尿路結石症97例29%、膀胱癌94例29%、前立腺肥大症52例16%などであり、脳神経外科は脳梗塞141例42%、脳出血91例27%、クモ膜下出血32例10%などであった。【まとめ】当院の特徴である泌尿器科、脳神経外科の算定が多い結果となった。今後、介入により早期のADL拡大、在宅復帰が行われているかを検証していきたい。